



ソウル 訪問に想う



長野清志

躍進する韓国とその課題

去る十月二十三日から二十八日にかけて、ジェフリー・クレイグ氏と共に、韓国MRAの招きでソウルを訪れる機会を得た。

四年振りに訪れたソウルは、正に秋たけなわ、イチョウやかえでが美しく色付き、青空に映えていた。東洋第二の高さを誇る、六十三階建ての大韓生命ビルを初めとした新しい高層ビル群に加え、たくさん建設中のビルがあちこちに散見され、その発展振りが印象的だった。アジア大会を無事成功に導き、次の二年後のソウルオリンピックに向けての準備も着々と進められていた。地下鉄も既に四線が開通していた。電車の中を通る新聞売りの売り声と、人々の読む新聞のハングル文字に、思わず自分が今ソウルに来ているのだと改めて気付かされるほど、その雰囲気は日本と似通っていた。足早に歩く韓国人々の勤勉さは、今や定評のあるものとなったが、土曜日も夕方まで仕事をしている人が多いという。この活力はちょうど日本が東京オリンピックを開催した六十年代の高度成長の時代に通じるものかも知れない。

ソウル訪問に想う/長野清志	1P
4年半の日本生活で学んだこと/ジェフリー・クレイグ	3P
私にとってのインド/杉 裕雄	4P
第9回MRA関西秋期大会レポート/兼松 恵	6P
アフリカ・ザンビアで過ごした2年間(その1)/寒河江 亮	8P
写真で見るMRAの歴史(塚本三郎氏ら西独を訪問、ブランド氏と会見、昭和34年)	11P

この「漢江の奇跡」と呼ばれ躍進を続ける韓国経済だが、余りの急激な成長ゆえのひずみも現れているとのことである。殊に人々の貧富の差が大きいようだ。また、いかに手早くお金を儲けることができるかといったことに関心が集中しがちだと、物質主義の風潮を危惧する声もしばしば耳にした。

大卒者の初任給（日本円で約七万円位）と高卒者のそれ（同じく約三万円位）とは二倍以上の開きがあり、そのため大学を目差しての競走は日本に勝るとも劣らない熾烈なものとなっているようだ。家庭教師が塾通いだとその過熱振りに批判が集まり、現在はそれらが一切禁止されている



●建設ラッシュのソウル市内

という。また、高い失業率も問題となっていた。そのため海外への移民を希望する人も多く、毎年四万人程の人々が北米、中南米などに向うとのことだ。加えて、汚職の問題、そして若い人々の間の性のモラルの低下も社会問題化しつつあると聞いた。しかし、私の眼には、韓国の若い人々の規律正しさの方が印象深く映った。

藤尾発言問題

今回の訪問は藤尾発言問題に揺れた直後だっただけに、いくばくかの緊張感をもって金浦空港に降り立ったのを覚えている。発言内容の是非を巡っては、色々な議論がなされている。しかし、現職の文部大臣からあのような発言がなされ、そのために韓国の人々、殊に若い人々が傷ついたという事実は、もつと真剣に受けとめなければならないと思う。今回も五百人ほどの高校生を前にして話をする機会を得たが、この問題に触れた時の彼等の反応は予想以上のものだった。このようにして深まった溝を埋めるためには大変な努力が必要になると思われる。最近もある日本の月刊誌でこの問題に関する誌上討論というのを読んで感じたのだが、どちらの言分が正しいかということ

を正当付けるための議論は不毛だということだ。これは我々の日常生活で誰かと思いがくい違った時のことを考えても明らかだと思う。もし相手に理論的に打ちまかされたら、いや、そうなればなるほど、より感情的になって相手の言うことを受け入れられなくなるだろう。つまり、このやり方では、これを契機としてよい良い日韓関係をどのように作り上げていくかという一番肝心な提言が導かれるはずがない。勿論、これにはただ問題を煽るだけのマスコミの姿勢にも問題があると思う。やはり、「どちらが正しいか」ではなく、両国の将来のために「何が正しいか」を視点に据えて考える必要があると思う。今、日本に必要なことは、自らの誤った点を反省し、それを繰り返さないための方策を考えることであり、相手にも非があつたなどと自らの誤ちを正当化することではないと思う。やはり我々は「足を踏んだ側」であり、まだ疼きを訴えている人々に対する思いやりの心を失ってはならないと考える。「一国の最大の防衛は隣国の尊敬と信頼をかちとることである」というフランク・ブックマン博士の言葉をかみしめた時、これから日本が何をすべきなのかの示唆を得ることができよう。

韓国のMRA活動

韓国では、日本の方々にもおなじみの鄭濬先生を中心として、主に高校生を対象にMRA活動が展開されている。これは将来を担う若い人にこそMRAを伝えようと、シングアウトと呼ばれるMRA合唱団を編成し、歌を通してその精神を伝えようとするものである。現在では全国三百以上の高校にこの合唱団が作られ、盛んに活動している。今回もソウルで開催された公演を見せて頂いたが、カラフルなユニフォームに身をつつんだ百名以上の高校生の歌と踊りは見事に揃い、言葉の分からない私達にも、その熱気が伝わってきてとても感動させられた。この将来を担う若い人々が成長していく時、前述した様々な問題も解決されていくかも知れない。また、これらの青年達と日本のMRAの若い人達との交流を更に深め、信頼関係を築いていきたいと思う。今回も韓国の方々には本当に暖く迎えて頂き、感謝の気持ち一杯だ。近くて遠い国でなく文字通り「近くて近い国」となるよう、もつと心を開いた交流を積み重ねていきたいと願って止まない。

(MRA事務局長)

4年半の日本生活で 学んだこと



ジェフリー・クレイグ(イギリス)

住むということは理解するということ

「日本のMRA運動を手伝って頂けませんか？」こんな招待状を受けとつてから、すでに五年の月日が流れました。当時私達夫婦は、生後六ヶ月であった長男フィリップと、私の故郷のスコットランドに住んでいました。日本滞在は四年半ほどになりましたが、その間、現在二才になる次男のリチャードが生まれました。現代は、光ファイバー、通信衛星、ファックスといった通信技術の進歩により、情報伝達が一瞬にして行われるようになりました。しかし、だからといって相互理解までが瞬時に可能になったという訳ではありません。一口に相互理解とはいっても実際に、言葉、歴史、教育などの諸要素が複雑にからみあうわけですから、分と時間のかかるものなのです。相手の国にある一定の期間住んでみるのが、お互いの理解を深める最善の方法だと思っていますので、私も妻のベロニカも、数年にわたり日本に住む機会を与えられたことを大変感謝しています。

皆さんのご好意とご協力のおかげで、日本人の生活、考え方、社会というものについて多くのことを学ばせて頂きました。その過程において、

息子達の存在というものが大きな貢献をしてくれました。自然な形で家族ぐるみの交際ができましたし、妻は息子の通っていた幼稚園でたくさんのお母さん達と知り合いになりました。また、東京だけでなく、北は山形から南は熊本まで多くの家庭に招かれました。お宅に呼んでいただけでなく、その国の様子を知る近道だと思えます。

ますます大きくなるMRAの役割

私達が日本にいる間、日本のMRAは色々な意味で力をつけてきました。「社団法人」として認可されたことがその最たるものでしょう。数多くの企業や産業界の方々が入会され、組織として強化されてきました。同時に、ミーティングや会議への参加を通じてMRAの目的を理解される一般の方々も増えてきました。これは、日本と世界のつながりがますます深まっている時だけに、大変重要なことだと思えます。今日の緊迫した世界経済の中で、日本に方向転換を求める圧力が強まっています。日本人はこの事態にどう対処していけばい

いのでしょうか？ こういう時にこそMRAの役割は大きいと信じます。MRAは、一人一人が自分の心や気持、生きる姿勢を正直に見つめ、向上改善の道を探ることを奨励しています。そして、より澄んだ心と頭で、学校や工場、会社、地域社会や国の現状を考え、変えていこうというのです。またMRAは、同じような考えをもった世界中の人々が一緒になって、世界に友好のかけ橋をきずく機会も提供してくれます。

「真の国際化」って どんなこと？

日本では「国際化」ということがさかんに言われますが、具体的に何を意味するのでしょうか？ 外国語を学び、外国食品を食べ、海外へ出かけ、外国製品を買うこともむろん大切なことですが、それ以上のことが求められていると思うのです。他国の人々の希望や問題を理解すると同時に、自国の歴史や問題、長所や短所を知ることが必要です。

この「真の国際化」は、一人一人に対する、チャレンジであり、これを成しとげることによって私達は、異なる人種や文化を理解し、世界の発

展のためにともに働いていくことができると思います。ここで大切なのは、「誰が正しいかでなく、何が正しいか」を求める姿勢です。それでこそ、国際化が実りあるものになるでしょう。

山河の豊かな自然に恵まれた日本には、同時に、台風、地震、大雪や豪雨といった、自然の力をまざまざと見せつけられる現象も数多くあります。日本は天然資源に恵まれていないとよく言われますが、「精神力と強い意志」を資源とすれば、日本にはそれが豊かにそなわっていると思います。日本と世界との距離がこんなにも縮まりつつある時です。日本の「精神力と強い意志」が他の国々と人々のためにも使われるべきだと思います。今こそ、その役割を担って頂ける方々が求められています。

クレイグさんご一家は昨年11月5日に日本を発たれ、1ヶ月間フィリピンや香港を旅されたのち、イギリスに無事帰国されました。今春からロンドンにあるMRA出版局で働かれる予定です。現住所は——
12 Palace Street, London SW1E 5JF

●インドMRAセンター、アジアプラトーで過ごした6ヶ月間

杉 裕 雄

私にとってのインド



ボンベイ空港 に到着

十三カ月と十日間滞在したオーストラリアを離れ、インドに到着したのは昨年の三月一日のことである。とうとう俺はインドにやってきたんだ……そんな感慨にふけりながらボンベイ空港の建物を出た。まだ未明だというのに沢山の人がいる。国際線の発着が集中する深夜から早朝にかけて、外国人旅行者目当てのインド人達がたむろしているから注意しなさいと言われたことがある。

サー（旦那）と言いながら、早速ポーターらしき少年が私のスーツケースを運ぼうとする。バスにはまだ間があるからと断ったのだが、少年はそれまで待つと断って離れない。その大きな目を輝やかせながら少年はしゃいでいる。どうやら彼の目には、日本人イコール金とでも映っているのだろう。「悪いけどこれしかないヨ」と、ポケットからコインを取り出してみせると、彼は怒って去っていった。次に来た男は「四十ルピー（五百八十円）でどうだ」とふっかけてきた。仕事がないから旅行者にたかろうと彼らが考えるのは理解できないこともないが、スーツ

ケースひとつ十メートルほど移動させて、一生懸命働いている人々の月収の半分近くを稼ごうという姿勢が（かつて私もそうであっただけに）嫌だった。これも貧困ゆえの卑屈なのだろうか。

スケートボードにちょこんと座った男が目の前をスーッと通り過ぎていった。よく見ると、右腕と両脚が無い。

アジアプラトー での生活

ボンベイからプロペラ機で三十分程南下すると工業都市ブナに着く。更にタクシーを三時間走らせてやっとなパンチガーニという村にたどりつく。現地語で「五つの丘」という名のこの村には、十の全寮制の学校が集まっており、教育も普及していると聞かされていた。なにかイメージと違うなあとは思っていたのだが、実際にみると、人、自動車、バス、自転車、水牛、山羊、犬、にわとりが、対等にアスファルトの道路を使っている光景が目飛び込んできた。私が漠然と抱いていたインドのイメージと大きな違いはないようだ。毎年、年末年始は国際会議に参加する世界各国からの人々で賑わうM

RAセンター、アジアプラトーだが、モンスターの季節である当時は、運動場でホッケーに興じる子供達の歓声だけが聞こえていた。

国際会議の時期を取らせてここに来た私は、センターの農場を手伝っていた。マハラシュトラ州政府からの援助も得て、アカシヤなど七種類合計二万六千本に及ぶ苗木を、モンスター襲来の前に、インドの荒れて干いた土地に植えつけるという計画だそうだ。

そして三カ月が過ぎ去った。「パンチガーニは本当のインドではない」以前、幾度となくそんな言葉を耳にした。だから最初の三カ月間はここで生活して、ビザ延長後は三カ月程旅行するつもりでいた。だがもうその考えは変えた。このパンチガーニが虚構のインドだとは思わなくなってきた。それなら本当のインドは何処にあるというのだろうか？ ここで、インド人農夫達と共に汗を流し、インドの大地に緑を与えることが、私にとってのインドだと思っている。

至る所にインドの女優いたきらびやかな看板が見うけられる。だがその看板の下では、無数の人々が路上で寝起きしている現実がある。彼らの生活を、単に物質的な基準で判断して、安易な同情をしてはいけないとは思っているのだが、小さな手を差し出す子供達がかわいそうで、コインのかわりにスナックをあげてしまう途端に仲間割れが始まった。

五十年代の古めかしいスタイルの自動車の群れ。際限なく鳴り続くクラクション。わずかな空間をぬうように道路を横断する人、人、人の群れ。声をからしながらリヤカーを引く物売り。路傍でくりひろげられる宴。美しいサリーをまとったインドの女性たち。乗客の降り降りが終わらないうちに走り出すバス。このボンベイの活気。三十年前の東京もこんな感じだったのではないだろうか。必ずハッピーエンドで終るインド製映画のスクリーンに、立ち上がって熱狂的な拍手を送るインドの人々。その素直な感情を大切にしてほしい。

このレポートは、現在イギリスのMRA出版局で働く杉君に、昨年、オーストラリアのスタディーコースを終了後に訪れたインドでの体験を書いて頂いたものです。掲載が大巾に遅れてしまったことをお詫びします。

アジアプラトーの概要

人種・宗教・年令・カーストなどの違いを越えて、より良い世界を作ろうという意志を持った人々の集まる場として、インドそして世界中からの3万5千人以上の人々の寄付によって作られた。1967年に最初のビルが、そして1973年に会議場のあるメインビルが完成した。1974年から産業人セミナーが定期的開催され、健全な労使関係の向上・発展に貢献する一方、農業、教育、青年、医療などの様々な分野の地域及び国際会議が開かれている。センターに隣接する15エーカーの農場は、センターに農作物、酪農製品を供給するだけでなく、新しい農法、牧畜技術の実施・指導の場を提供し、近隣はもちろん、州の農業技術の向上に寄与している。

第9回

MRA関西秋期大会

レポート 兼松 恵



「思いやりの心」とは尽くすこと、そして与えられること

六甲山を背に、落ちついた竹^{たけ}まいを見せる神戸の住吉研修所で、第九回MRA関西秋期大会が、一泊二日の日程で開かれた。関西のみならず、九州や関東から、そしてフィリピンのアリス・カデルさんや、四年余にわたり日本のMRAで活躍していただいたクレイグさんご一家など、合わせて九十二名が参加した。大阪の

沖田夫妻の司会により、家庭的な雰囲気の中でスタートした今回の大会は、三つに分けて行われた分科会などもふくめ、活発な意見の交換がなされた。発言の一部を紹介したい。

アリス・カデル（フィリピン）「思いやりの心」という言葉は、他人に尽くせば尽くす程、逆に自分が与えられることになるのだということを教えてくれる。去る二月のフィリピンでの政変時ブラジルにいた私は、今こそ自分の国に戻りたいと思った。その時、シン枢機卿の言われた「神に従って働いている者に国境はない。世界のどこにいても、私達一人ひとりが世界で起きている事に係わっている」という言葉が頭にうかんだ。日本の方々と心を開いて、太平洋諸国のパートナーとして一緒に世界の事を考えたい。

田嶋克巳（神戸輸入促進フォーラム）最終的に日本からの輸出を増やすという経済的立場だけで考えた輸入努力だけでなく、相手国の産業や、世界の人々の幸せを考えて市場開放してゆくべきだ。これが国際化をすすめていく上で、日本のとるべき道だと思う。

福西真理子（大阪）中学二年の時、コーの大会に参加して、世界に目を向けることの大切さを知った。高校生になってからはその体験を忘れがちだったが、この大会に参加して、先輩の方々がむしろ私達若者よりも生き生きとしているのを見て羨しく思った。段々と自分を小さくしていたが、又、視野を広げていきたいと思う。

ヒュー・ウイルキンソン（青山学院大学）私達一人ひとりに、その人生において果たすべきユニークな役割が用意されている。静かな時をもって自分の内なる声に耳を傾けた時、その役割が何なのかが見えてくる。また、ありのままの自分の姿が、そしてどう自分を変えていくべきなのかも分かってくる。自分のことを理解するにつれ、他の人の問題、人の心の動きが分かってくる。それぞれ



●アリス・カデルさん(左から2人目)と吉村和枝さん(右端)

が秘めた可能性を引き出すきっかけを作るのがMRAであり、それは毎日心の声を聞くという決心から始まる。

佐藤健次 日本で外人といった場合、それは白人を指し、アジア人や黒人などは含まれない。この言葉一つにも日本人の偏見がある。ブックマン博士は、「日本はアジアの燈台になれ」と言われたが、その前堤としてアジアの人々ともっと交流する必要がある。アジアの人に街で会ったら、先ず自分から話しかけてみようと思った。

相馬雪香 例えそれがどんなに小さいものに見えようとも、一人ひとりの決意こそが本当に大切である。自

分で勝手に小さいものだからと決めつけずにその決意を実行する、そのことが歴史を変えるようなことに結びつくかも知れない。また日本が島国であるからこそ、大陸のことを思いやり、相手の立場になって考え、その痛みを感じることでできる国、そして国民にならなければならない。

◇ ◇ ◇

今回の大会には、九州MRA協会から六名、国際ソロプチミスト福岡支部から四名、計十名の方々九州から参加された。MRAは全員が初めての体験で、当初やや不安を抱いての参加であったそうだが、卒直で飾り気のない自然な態度の中に、思いやりの心が温かく伝わってくる「雲囲気」に、固い気持も柔らかいだの、のちにある人が言われた。

その感想を二人の方にまとめていただいたのでご紹介したい。

荻尾賢一（西日本新聞社）

人にはそれぞれの人生の中で、さまざまな「出会い」があり、それによって淀みかけた心、眠りかけていた心呼び起こされることもある。今回のMRAとの「出会い」は、私にとってはまさにこのことがいえる。

日常の自分というものをいま一度見直すと、仕事、家庭のこと、また

自分にかわりのある極く限られた範囲に対しては、一応の責任を感じながらそれなりにやっているつもりでも、自分はいま何を基本に生きているのかというと何も無い。水面は平穏に見えても、永年の間には水底に塵やゴミが沈澱し、何かの時にその水が掻き回されたら、たちまち水全体が濁ってしまう。掻き回されても濁らない水を保つためには、時々はその沈澱物を掃除しておく必要がある。

人の心もそれと同じではないか。どんな事が起っても正しい基本にもとづいた平常心を保つためには、心の掃除が大切であるということ、この大会に参加して感じた。

大会二日目の朝、私は相馬雪香先生の講演録を会場で求め、先生にサインをお願いした。快く応じて下さった先生は署名のあと、次の言葉を記された。「明日の日本は世界に貢献する国になれたらと念じております」

何と視野の広い言葉であり、無私、純潔、かつ愛であろうか。「目標を掲げたらむずかしいと思っはいいけません。決意し、実行していけば、道は自ら開かれるものです」と語られる先生の目は若人の目のように輝やっていたのを忘れることができない。

「世界のための自分」ということ

を、私達一人ひとりが、ようになるのがMRAの目標だと思ふ。自身も変らなければならぬと感じた。これからも心の中の沈澱物を時々払いのけながら、この気持を持ちつづけたらと思う。

吉村和枝（西日本銀行）

今回のMRA関西西秋期大会参加の体験は、これからの私の生活への大きな刺激となりました。何気なく毎日を過ごしていた私は、皆さんのお話しをうかがいながら大変耳の痛い思いをしました。参加者の皆さんの年令や職業も色々で、当然様々な考えを持つ人々の集まりであったにもかかわらず、例えば「世界平和」などの大きな問題に取り組み、解決の方法を求めようとする姿勢が、参加者全員に感じられました。

「自分一人では解決できないかも知れない。でも自分から進んでいかなければ何も始まらない。解決の糸口は、まず自分を見つめて良い方向に変えてゆくことだ」という信念です。その精神は実際の活動の中にも活かされています。つまり、世界平和を唱えることも大切ですが、その平和もまず私達の住むアジアの問題を解決していかなければ望めないという事です。大きなことを成し遂げるには、まず足元を固めなければ

ならないというお話しに大変感銘を受けました。

フィリピンから参加した女性が、「日本は今アジアの中で最も秀れた技術を持っています。先進国とアジアの発展途上国のかげ橋になれるのは日本であり、それは日本の役目と言えるでしょう」と話されました。その意見はフィリピンの一女性のものでなく、第三世界全体の日本に対する切なる意見、希望だと感じました。

又、住んでいる町の人口の六割が在日韓国、朝鮮人だという大阪の高校生は、「彼らの存在を認めないという事は、僕の友人やクラスメート、つまり僕の生活の六割が否定されてしまうということです」と訴えました。なんと説得力のある意見でしょう。私は彼こそが本当の国際人だと思いました。他国のことを自分の生活に密着させ大切に考えていく身内意識ができた時、本当の平和も望めるのだと思います。そのような意識を高めていくのは、結局自分自身に他ならないのであり、しっかりと自分を見つめる時間が重要なのです。私のこれからの生活に、このような問題意識を与えてくれたという意味でも貴重な体験であったと思えます。



青年海外協力隊員として

アフリカ・ザンビアで過ごした 2年間

(その1)

首都ルサカでの 生活

ベランダ越しに見えるバナナやとうもろこしの葉が、午後のけだるい風に吹かれて、気持ち良さそうに踊っている。

群青色の空にポツカリと浮かぶ雲たちは、まるで絵画のそのように、どっしりとそこを動かない。裸足で飛び回る子供達の喚声が、地鶏のけたたましい鳴き声と共に、部屋にとび込んでくる。

部屋の片隅では、この部屋の主である白いヤモリがじつと私を見つめている。十八歳まで山形の片田舎で育った私には、バナナの木を除いては、なんとなく懐しい風景に思えた。こうして椅子に座って、ぼんやりと外を眺めていると、時がゆつたりと流れていくのが感じられた。

ここはザンビアの首都、ルサカ。ザンビアは中央アフリカ南部に位置し、近隣を八ヶ国に囲まれた内陸国だ。国土は日本の約二倍あるが、総人口は六百万人で、七十三の部族からなる黒人国家である。一九六四年の独立以来、キリスト教に根ざした人道的社会主義を掲げるカウングダ統領が、強いリーダーシップを発揮して国を治めている。日本はザンビア

を知っている人は少ないと思うが、東京オリンピックの開催中に独立した国といえば、思いあたるかも知れない。旧宗主国であるイギリスの影響や、部族間で使用言語が違うという点などもあり、公用語は英語となっている。

写真技術の指導

昭和五十九年一月、私はこの国に同期隊員八名とともに、青年海外協力隊員として派遣された。任期は二年間であった。ルサカ（人口六十万）にあるエブリン・ホーン・カレッジのジャーナリスト養成科に、写真技術の講師として配置され、延べ百人以上の学生に写真を教えた。教育の分野に携わる隊員としては、二年という任期はあまりにも短かすぎた。少なくとも五年はいたかったが、反面、日本へ帰ってからの生活のことや将来のことを考えると、すでに青年ではなく、中年（？）協力隊員の域に達しようとしていた私には余裕がなかった。楽しかった訓練時代には、想像もできなかったジレンマである。その悩みゆえ、時には否定的に考えがちになる私をそのたびに、ニュートラルゾーンに引き戻してくれたのは、ちよつと古いけど夢と希望、私の大好きな言葉であった。

どうしても協力隊に入りた

その夢と希望を持ち続けているなかつたら、協力隊参加は難しかったと思う。仕事は、途上国への技術協力がメインなのだから、普通は、まづ技術をもっている人が参加する。だが私の場合は、参加を決心した時は、技術資格など何も持っていないかつた。

六年前の秋、どうしても協力隊員になりたいと、大志を抱いて協力隊事務局を訪ねた。それまで、美容師として働いていた私は、「美容師として参加できませんか？」と尋ねたが、答えはノー。逆に、「農業をやってみませんか？」と聞かれる仕末だった。そして、「私は写真が趣味です！」結局、この一言が、その後の二年間を昼はMRA事務局を手伝い、夜は写真学校に通うという人生コースに私を進ませることになったのだ。そんな生活だから収入はほとんどなく、学費、その他でみるみる借金が増えていった。借金ができるのは信用があるからだ。若いうちの借金は当り前、いづれ倍にして返せる日も来るゾ」と、自分に言いきかせて、夢と希望に満ちあふれていたわけだ。とにかく、

親兄弟、諸兄の暖かい思いやり（もししくは、あきらめ）のお陰で、私はザンビアに行けたのだと肝に銘じている。

美しくなりたいものを

美しじとはいえない!?

五年間ほど、美容師として働いていたが、その職を捨てるのにはなんのためらいもなかった。仕事柄、本心ではそう思わないものを「美しいです。ステキです」と、いわなければならぬことに、我慢できなくなり、さつさと廃業してしまった。失業後は、海外で勉強するチャンスをもMRAから与えられ、二年間ほどをオーストラリアやヨーロッパで過ごした。そこで得たものは大きく、まさに目から鱗が落ちる思いであった。それまでの私には縁遠い存在であった難民問題や南北問題が、心にして目にとびこんできた。この体験を無駄にすまいと肝に銘じた。すでに二人の兄が協力隊員として、タンザニア、インドで働いていたので、協力隊のことは一応知っていた。美容師時代は、世の中、立派な人達もいるものだ、くらいに思っていた。それから六年がたち、私はアフリカで協力隊員として、兄達の跡を継い

た。夢と希望はやはりあるものではない。

協力隊員になるための

訓練が始まった

協力隊員となるには筆記と面接の試験に合格しなければならない。第一次の筆記は、専門技術分野、英語、それに小論文であるが、普通に準備しておけば、まず落ちるものではない（と思う）。私は写真の第一次合格者八名の一人として、第二次の面接に臨んだ。和やかに自己紹介などするが、心の中では、「あいつとあいつはノーマーク、これは要注意」などと、早くも火花が飛びかう。一人しか合格しないことは、皆承知している。「合格したら、東京で再会しましょう！」そんな実現するはずもないことを誓い合った。そして四ヶ月後、第二次試験合格とザンビア行き決定を伝える電報を受けとった私は、未だ見ぬ地へのあこがれに心を熱くしたのだ。

いよいよ三ヶ月間の派遣前訓練に入ることになった。異様な集団であった。北海道から沖縄まで、実にさまざまな職業や経歴を持った人間が集まっている。休職参加の人もチラホラいるが、退職して参加した

●楽しい(?)訓練時代



人が圧倒的だ。二十歳の学生から三十代の主婦まで、何か、得体の知らないエネルギーが充満していた。規律の多い集団生活に、反発する人、へきえきとした人もいたようだが、私は十分にエンジョイできた。ただし、朝の早いのと、凍結した路上でのランニングには閉口した。しかし、そのお陰で体力は数字の上では十代に若がえった。

長い団体生活のせい、か、数少ない女性陣が、全員美しく見える病いに患る男性も、数多くいた。訓練中、七組のカップルができたと聞いた。片想いは、もつとあつたに違いない。大変だ、といいながら、皆、結構楽しんでいったわけだ。

訓練は、やはり語学に相当の重点がおかれている。聞くところによると、この三ヶ月で、大学四年間分の量をこなすそうだ。平均して一日十時間以上も英語漬けになる。そこまですべてもなかなか上達しないから英語って難しい。

協力隊員にとって、仕事上の最大の障害は、やはり言葉がよく通じないということである。仕事の内容や働く場所にもよるが、いくら立派な考えや技術を持っていても、それを伝えられなくては仕方がない。熱意で通じあうことも確かにあるが、それだけではどうしようもないこともそれ以上に多い。

そして、ついに最終選考。五十八年度三次隊百二十三名、全員合格し、それぞれの任地へ出発する日が近づいてきた。私の夢であったアフリカ行きが、今、実現しようとしている。昭和五十九年一月二十五日。期待と不安が入り混じり、ともすれば無口になりがちな私達を乗せて、ジャンボは成田を離れた。

アフリカの大地を

踏みしめて

空から見るザンビアは一面に、緑のじゅうたんを敷いたようで、赤茶

けた荒地を想像していた私には、大きな驚きであった。

本当にこの地を、今世紀最大の干ばつが、飢饉が襲っているのだろうか？あのやせおとろえた栄養失調の子供達を、私はもうすぐ見るのだろうか？

意外なほど近代的で、手入れの行き届いたルサカ空港が間もなく視界に入ってきた。真冬の日本を発った私達を迎えてくれたのは、ジリジリと照りつける強烈な陽ざしと、一瞬、息がつまりそうになるザンビア人の体臭であった。どちらかというと、嗅覚オナチの私が、本当にクラックラックときた程、それは強烈なのである。エレベーターやバスの中など、人が沢山いる場所は苦手であった。花がある。赤や黄やムラサキの原色だ。目に痛いほどの鮮やかさだ。首筋から汗がダラダラと流れおちる。「もう、ここからは訓練ではない。これから二年間、この土地で過ごすんだ。私は今、アフリカの大地にいる！」

感慨にふける私達を乗せて、当面の宿舎となるザンビア協力隊事務所へ、車は出発した。

原色の人々

空港周辺には、ほとんど人家がな

かったが、事務所付近につれ、人々の姿や意外に立派な家並みが見え始めてきた。褐色の肌を包むピンクやブルーの原色を組み合わせた洋服が目まぶしい。なるほど！これがアフリカの色か、と感心する。真赤なスーツに赤いシャツ、赤のネクタイ、そして赤いクツ……堂々とした男性である。見ている私のほうが恥ずかしくなる。日本人好みのくすんだ中間色など、ここでは汚れている位にしか、思われまい、四季のある日本、乾季と雨季のザンビアでは、色彩やセンスにもかなりの違いがあつて当然だ。

協力隊事務所は、ルサカの市内から七キロ程のローマという住宅街にある(当時)。治安は、昼も安全ではないが、夜は、もっと危険である。事務所で時々パーティーを夜おそくまでやるが、その帰路は、警察や軍隊がパトロールしてくれているといえ、安心するわけにはいかない。現に、ギャング団と治安当局との銃撃戦の音が、週二回位は私の部屋まで聞こえてきた。(次号に続く)

御案内

(社)国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際MRA会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の「心の開国」を推し進めるために活動しています。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせていただきます。

一、会費

(一) 正会員

個人 年額 三〇〇〇円

法人 年額 五〇〇〇円

(二) 賛助会員

個人 一〇〇〇円以上

法人 五〇〇〇円以上

(共に年額)

一、銀行振込先

富士銀行動坂支店

(普) 九九一八九二

住友銀行上野支店

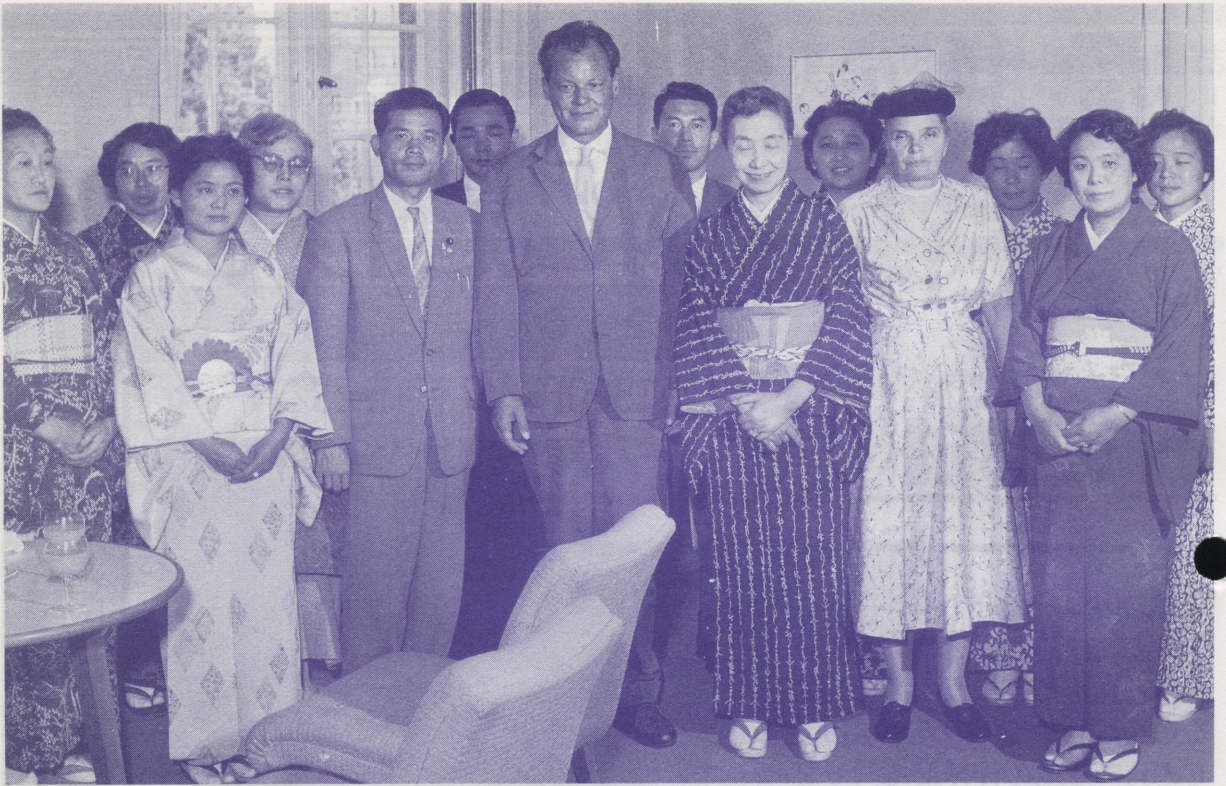
(普) 二五四九三七

一、郵便振替口座

東京八二三八二八九

口座名 社団法人国際MRA

日本協会



写真で見る MRAの歴史 No.3

昭和34年、アメリカのマキノ島でMRA国際会議に参加した塚本三郎（現民社党委員長）、加藤シヅエ両国会議員、及び社会党国会議員夫人ら一行12名は、帰路ヨーロッパを訪れ各国要人と会見した。写真は当時のベルリン市長で後の西独首相、ウィリー・ブランド氏を囲む日本人一行。左から5人目が塚本氏、1人おいてブランド氏、1人おいて加藤氏、1人おいてフランスのマダム・イレーヌ・ロー（元仏社会党婦人部長）

塚本三郎氏ら野党の代表、西独を訪問、ブランド氏と会見
（昭和三十四年）

事務局近況

●十一月の留学生との交流会には、東京工学院でコンピューターを学んでいるタイのサンポットさんをゲストを迎えました。毎月第三日曜日に千駄木のMRAハウスで開かれるこの会に是非ご参加下さい。

●昨年末から今年一月三日まで、インド、パシフィックで開かれたMRA国際会議「開発のための対話」に、事務局より長野、高橋の二名を加え計七名の方々が日本から参加されました。会議のレポートを次号でお伝えしたいと思います。

●昨年のコーの大会で、特に日本人参加者のために積極的にお手伝いして頂いたスイスのシルビア・ツバーさんが（社）国際MRA日本協会の招きで来日されました。約六ヶ月間の予定で朝日カルチャーセンターで日本語を学ばれます。今年もコーで日本人のためにもっと役に立ちたいとは本人の弁。皆様宜しくお願致します。

今年前半の主な行事

- 環太平洋国際会議（ニュージーランド）
二月五日～十日（於）ナラワヒヤ
- 中南米キャンペーン
二月～四月（於）グアテマラ・ブラジル・アルゼンチン・コロンビア、他
- 第十三回スタディーコース（オーストラリア）
三月一日～五月十六日（於）メルボルン・アーマ
- 国際産業人キャンペーン（東京・御殿場・大阪）
五月四日～十四日（小田原会議は十月に開催）
- 日韓青少年交流プログラム（韓国）
六月（於）ソウル

相馬雪香 著

心に懸ける橋

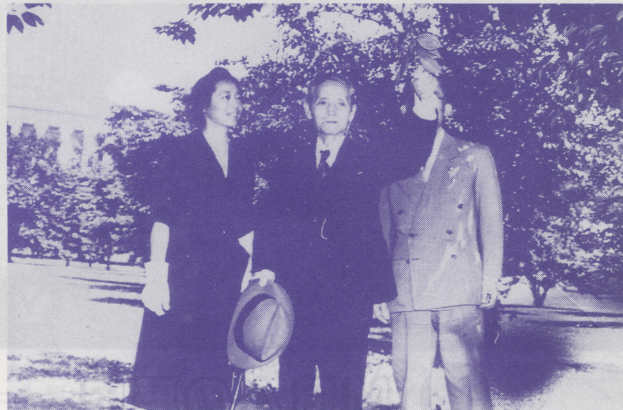
おせっかいやきの「雪香さん」

定価1500円

232頁

予約受付中

1月15日
発売決定



第1章 政治家の娘として

- 1 父・尾崎行雄のこと
- 2 初めて見たアメリカ・イギリス
- 3 イギリス人の血を引いた母のこと
- 4 先生を困らせた私の学生時代

第2章 華族の女房となつて

- 1 相馬との結婚と馴れない生活
- 2 MRAの精神が私の背骨となる
- 3 イギリス人の血を引いた母のこと
- 4 先生を困らせた私の学生時代

第3章 引揚げ、戦災、飢餓

- 1 北満の中尉夫人の生活
- 2 戦後の飢えた生活
- 3 リーダーズ・ダイジエストで働く
- 4 戦禍のヨーロッパを夫と共に

第4章 世界平和の鍵を求めて

- 1 超党派で出来た尾崎記念財団奉仕の心を大切に活躍する退職女教師たち
- 2 動物保護と管理の法律づくり
- 3 平和の実現に働くもう一つの国連、MRA
- 4 難しい日韓関係の中で韓国女性と手を結ぶ
- 5 日本人の心は冷たくなかった「難民を助ける会」始動

第5章 心に懸ける橋

- 1 自分、家庭、社会、世界に新しい「女らしさ」と「婦人運動」
- 2 経済大国としての日本人の役割

心に懸ける橋

おせっかいやきの「雪香さん」

相馬雪香 著

世の中、「たった1人、自由になる人間がいる。それは自分であって、平和というのは「唱えるもんじゃなく、つくっていくもの」。《憲政の神様》尾崎弴堂の三女として、明治45年東京に生まれる。若いときから平和を願い続けてきたのに、戦争に取り込まれてしまったくやしきから、戦後、MRA（道徳再武装運動）に参加。以来「道義なくして、真の人間関係は築けない」と説き続けてきた。その激しいまでの生き方を、初めて明らかにした《万年女子学生》、「おせっかいやきの『雪香さん』」奮戦記。